

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 128 号

平成24年12月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より（7）

第19講 神の義（3）

常に義とせられつつ

彼らは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである。（ロマ書3・24）

新しい24節に入ります。口語訳では、「彼らは、価なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである」となっていますが、原語は「常に義とせられつつ」となっています。原語は、受動態動詞の現在分詞形ですから、「常に義とせられつつ」と訳す以外に、他の訳し方はありません。ただの一語ではありますが、実に、宇宙的な重さをもつ言葉です。これが福音の中心的思想を言い表わす言葉で、これを信受するかしないかで、我々が救われるか、滅亡するかが決まるのであります。ところで、この「常に義とせられつつ」という言葉がどこに掛かるかは学者によって異なり、多くの議論があります。しかし、どこにかかると決定できないとする学者の説に対して、我々は大意をくめば十分に決定できると思います。この「常に義とせられつつ」という句がどこにかかると言いますと、それは「イエス・キリストによるあがないによって」という最後の句にかかります。すなわち「イエス・キリストの贖いによって、常に義とせられつつ」となるのであります。

すなわち、我々は、我々の行いに寄らず、我々の信仰にも寄らず、「我々の」と付く何ものにもよらずして、ひとえに「キリスト・イエスにある贖いによって」、我々は「常に義とせられつつ」復活の朝にまで至るのであります。これをクリスチャンと言う。ですから、「キリスト・イエスある贖いによって」というこの聖句は、「常に義とせられつつ」という聖句と同じ重さがあります。その理由は、「常に義とせられつつ」生き得る唯一の原因は、「キリスト・イエスにある贖いによる」からであります。「ただひとえにキリスト・イエスにある贖いによって、常に義とせられつつ復活の朝にまで至る」というのが、我々クリスチャンが信すべき信仰の客体、第 2 の真理です。これが、パウロがロマ書 3 章 21 節から 8 章 39 節までにおいて詳しく説いている信仰（個人の救い）の要約であります。

(P.171)

贖い

「贖い」とは、イエスが十字架にかかって、我々の身代りになって、すべての罪を処分して下さい、我々に永遠の命を与えて下さったことを言います。この永遠の生命というものは、イエス・キリストの贖いにより、常に義とせられつつ、賜物として、神の恵みとして与えられるものであって、人間の側では何もする必要はありません。全部が恵みです。イエス・キリストの贖いによって、神の恩恵として、賜物として、この永遠不滅の生命を受けることを信仰と言う。この真理を真受けにして、「そうか」と受け取ることを、信仰によって救われるという。...

諸君！この2節(3章23,24節)の原語訳をよく見て下さい。この23,24節の中には、「信仰」という字がないでしょう。君たちは「自分は信仰が浅い、薄い」などと言って、この信仰という字で引っかかっている。しかし、それは大間違いです。人間側の信仰を必要としない！人間の善行を必要としないのと同様に、人間の信仰も必要としません。ストレプトマイシンは、それを飲みさえすればよい。これは簡単です。万人が往けます。ここには、受け方の区別もありません。すなわち、信仰の浅い深い、長い短いの区別はありません。我々クリスチャンは、ひとえに贖いにより、賜物として、恩恵により、常に義とせられつつ、復活するのであります。

内村先生は、自分のキリスト教は主を仰ぎ見る「仰瞻教」であると仰せになりました。私は、ロマ書10章13節にあるように、「我が主イエスよ」と主の名を呼ぶ「称名教」だと申しております。否、私はというよりは、仏教浄土門の祖師方は、きっとキリスト教を「称名教」だと仰せになるでしょう。

ヨハネは、「イエスを神の子キリストと信じる者が、すべて永遠の生命を得るためである」(ヨハネ伝3章15節)と説明していますが、このイエスを神の子と信じるとはどういうことかと言えば、「贖いにより、常に義とせられつつ生きると信じる」ことであると、パウロは説明しました。すなわち、ヨハネが言う「イエスを神の子と信じる」とは、パウロのこの「義とせられつつ」という3章24節を信じ

るのと同じことでもあります。

(P.172 ~)

宗教と道德

そもそも、人に善いことをする、愛をもって人に対して善行をする、これだけでは宗教とは言えません。善行は道德ではあっても、宗教ではない。善行をして、人を苦しみから助けること、これは道德であって、宗教ではありません。

宗教とは、人間の理性や経験では理解できない、これらを超えた深い靈的真理を信じて、その信仰の結果、魂が砕けて、朽ちない永遠の生命を頂いて、平安な心をもって、自己に打ち克つ力を頂いて善行をすること、これが、宗教であります。そして、キリスト教で深い靈的真理を信じるという場合のその真理とは、この 23 , 24 節、この 2 節の内容のことです。

私は、この 24 節がロマ書で最も重大な箇所であると申しましたけれども、司会者に読んで頂いた 10 章 9-13 節も、これと同じ重大さがあります。すなわち、ロマ書で最も重大な節を挙げよと言われれば、本日の 3 章 24 節と、10 章 9 節、13 節、この 3 つの節を挙げたい。これらの節には、いずれもロマ書の全体が圧縮されています。

3 章 24 節は、10 章 9 節にも圧縮されますし、13 節にも圧縮されます。学者は、聖書で最も大切な部分はロマ書であると申しますけれども、聖書の全体は、ロマ書のこれらの節にそれぞれ圧縮される。なぜなら、これらの 3 つの節は、いずれも同じ救いの条件である信仰の客体、イエス・キリストの十字架の贖いの力を、圧縮して表わしているからであります。キリスト教の救いというものは、所詮は、キリスト・イエスにある贖いの力によるのであります。

(P.174)

ロマ書 3 章 24 節は福音の肝なり、目なり、魂なり

ロマ書の真理は、我々には外国語です。人間の考えでは理解できません。我々人間には興味がない。だから、教会から家に帰って来た途端に、我々はすぐそれを忘れてしまうのです。家に帰れば、ご飯を炊いたり、雑用をしたり、家人に「けしからん」などと文句を言ったりしているうちに、それをすぐに忘れてしまう。そうですから、我々は、外国語を勉強するように、毎日これらの真理を繰り返し、学ぶ必要がある。外国語は、放っておいたらすぐ忘れてしまいます。

仏教浄土門では、浄土門の福音とも言うべき御経の文句を善導大師が四十八文字で解釈なさいましたが、法然上人は「この四十八文字は本願の肝なり、目なり、魂なり。常に目にもあて、心にも思い、口にも言え」と言われました。また法然上人は、「信じても信ずべきは乃至十念の詞、たのみてもたのむべきは必徳往生の文なり」と言われた。この法然上人のお言葉を借りて言えば、「ロマ書 3 章 24 節は福音の肝なり、目なり、魂なり。これを常に目にも当て、心にも思い、口にも称えようではないか。信じても信ずべきは、『常に義とせられつつ』の詞であり、たのみてもたのむべきは『賜物として、神の恩恵により、キリスト・イエスによる贖いによりて』の文句である」となります。

これは外国語的真理であって、いつもこの世にへばりついて「俺が俺が」と言っているようでは、なかなか分からない真理であります。こと程左様に、我々は徹頭徹尾この世のものに執着しています。すなわち我々の心は曲がってしまっています。ですから、この 3 章 24 節だけで結構ですから、法然上人が言われたように、我々は、この真理を常に目にも当て、口にも言い、心にも思う必要があります。私は、この世のものが欲しい。しかし、聖書の真理はこれでありませぬ。聖書を学ぶという以上は、この真理を学ぶ必要があります。

(P.175)

第20講 神の義(4)

キリストの贖い

キリスト教は、イエス・キリストの贖いを説く。キリストの贖いの力によって救われるということを説きます。自分の信仰にもよらず、自分の行いにもよりません。自分と名の付く何ものにもよらず、ひとえにイエス・キリストの贖いのみによって、我々は常に義とせられつつ、永遠不滅の生命を頂きつつある、これがキリスト教が説く救いであります。忙しい人は教会へ来る必要はありません。この箇所を学ぶだけで十分です。もし21-26節まででも難しいのであれば、「常に義とせられつつ、賜物として、恩恵により、イエス・キリストの贖いによって」という、この24節だけでよい。キリスト教は、これに尽きています。

これはたびたび申す通り、靈的真理であります。この靈的真理というものは、人間が欲しいものではありません。猫は鰹節が欲しい。我々は、この世のものが欲しい。この世で善行をしたい。この世で褒められたい。この世で大きなことをしたい。この世で人を助けたい。我々は、この世のことばかりに、眼に見えるものばかりに、へばり付いています。この真理は靈的真理ですから、我々にとっては、いわば外国語です。そうですから、この真理を我々は常に口で言い、心で思い、目に当てる必要がある。外国語は、使わなかったなら忘れるでしょう。深い靈的真理というものは、人間にとって縁遠いもの、外国語です。人間は、常にこれを忘れて、自分の悲しみ、苦しみと、すべてが自分自分ということになる。しかし、真理ならざるものを信じることを迷信と言うならば、自己中心、この世中心と言うのは人間の最大の迷信であります。福音の真理は外国語です。これをマスターするためには、毎日これを口で言い、心に思い、そして目にも当てる必要があります。その時、我々の人生が一変するのみならず、我々の容貌が一変してきます。我々に力が出てくる。己に克つ力が出てきます。諸君！ やって見給え。

(P.181)

第 2 1 講 恵心僧都に学ぶ

恵心僧都（源信）と阿弥陀経

恵心僧都は、その法名を源信と申されます。天慶 5 年（西暦 942 年）に大和国葛城郡当麻にお生まれになりました。これは丁度、私の生まれたところから 2 キロほど離れた場所で、私は先日、郷里に帰りました折に、教友たちと共に僧都誕生の地を参詣してきました。恵心僧都は寛仁元年、西暦 1017 年、数え年 76 歳でお亡くなりになりました。郷党の先輩として、私は、誠に光栄に思っております。

〔恵心僧都は、〕長和 3 年(1014 年)、亡くなる 3 年前の 73 歳の時、九条右大臣の請により、日本の指導者達の前において、阿弥陀経を講義された。その講義が現在残っています。...私は今、満 72 歳ですから、大体私の年齢の時に、日本の指導者達の前で、阿弥陀経の講義をされました。

その序文に曰く、「阿弥陀経とは生死しやうじの海を渡るの舟楫しゅうしゅう、清涼せいりょうの地に至るの輪りん輓かんなり」と。「生死の海」とは現世のこと、「清涼の地」とは極楽のことです。阿弥陀経とは、この世を渡る船、極楽へ行く車だと言われたのであります。私は、宗教とはこういうものだと思う。永遠不滅の生命に至るの車であって、同時にこの苦しい人生を渡るの舟、この世を渡っていく力であると。これは、真実の宗教を説明している言葉です。福音は天国へ行く飛行機です。永遠の生命と結びついているもの、これを宗教と言う。それ以外を宗教とは言いません。それ以外は道徳です。この世の善行は、人間にとって、誠に結構なことではありますが、それは宗教ではない。宗教というものは、永遠不滅の世界と結びついていなければなりません。...

(P.187)

恵心僧都と阿弥陀経、ルターとロマ書の関係

〔阿弥陀経講義の〕本文の最後に、源信曰く、「余が如きは二千年の末たまたまこの経を聞いて今の願を為す。当生とうしょうの物のあにまた豈亦彼の力に非ずや」とあります。漢文ですから、これを現代の言葉に直せば、「私は阿弥陀経が書かれてから二千年経って初めてこの経を聴いた。そのお蔭によって極楽へ行けるといふ願い(ロマ書で言えば復活の望み)を持っている。私もそうだが、将来、その望みを持つ者は、自分の力で持つのではなく、ひとえに救い主の力によるのだぞ」と結んでいます。これが、源信と阿弥陀経との関係でありまして、いかに恵心僧都の信心と阿弥陀経との関係が深いかが分かります。あたかもルッターとロマ書の関係のごときものです。...

ルッター曰く、「ロマ書は実に新約聖書の重要部であり、又最も純真なる福音である。すべてのキリスト者が一字も余さずこれを暗記し、その靈魂の日々の糧とするに十分値している。いかに読んでも読み過ぎることはなく、いかに深く考えても考え過ぎることはない。かえって学べば学ぶほど、ますます、尊さと味わいとを増すのである」と。こういうふうにはルッターはロマ書を解しておりますが、私はルッターがロマ書を解したよりも、恵心が阿弥陀経を解する方がより深いのではないかと思います。

由来、宗教の信仰とは、経文を信じることです。我々は、聖書の文字を通して、信仰によって生命をつかむ。教会へ来る時だけ、聖書を持ってきて、平成は聖書を読まない、そんな者は、何十年教会へ来ていても、モノにならない。我流になります。自分で信仰があると思っけていても、聖書を読まない者は、駄目です。信仰というものは、5年や10年で簡単に分かるものではありません。一つの外国語を学ぶにも10年はかかります。いわんや、この天来の啓示された真理を学ぶのに、3年や5年で分かると思ったら、とんでもない間違いです。

私は、源信が阿弥陀経を愛したごとく、ロマ書を愛したい。

(P.188 -)

横川法語

これ（横川法語）が、恵心僧都の本領が出ているところで、僧都の教えを一文にしたらこうなります。「阿弥陀経とは生死しやうじの海を渡る

の舟楫しゅうしゅう、清涼せいりょうの地に至るの輪轆りんかんなり」という、その中身がこの横川法語に書いてある。こういうものは日本人は読めば分かります。日本人の特権です。私は浄土真宗のことを島村清吉という先生から学びました。先生は、「歎異抄」について、「これは将来、世界の宗教学者が日本語で研究する時が来ると確信する」と言われました。

横川法語、一枚起請文、歎異抄、これらは真宗聖典には必ず出てきます。横川法語は、あるいは信仰の法語として、日本語で書かれた初めてのものであったかも知れません。それまでは漢文で書かれているが、これは和語で書かれています。

横川法語

まず三悪道を離れて人間に生まるること大きなるよろこびなり。身は賤しくとも畜生に劣らんや。家は貧しくとも餓鬼に勝るべし、心におもふことかなはずとも地獄の苦に比ぶべからず、世の住み憂きは厭ふたよりなり。このゆえに人間に生まれたることを喜ぶべし。信心朝けれども本願ふかきゆえに、たのめば必ず往生す。念仏ものうけれども称えれば定めて来迎にあづかる。功德莫大なる故に本願に遇ふことを喜ぶべし。また云く、妄念はもとより凡夫の地體なり、妄念のほかに別に心は無きなり。「臨終の時までは一向妄念の凡夫にてあるべきぞ」と心得て念仏すれば、来迎にあづかりて蓮台に乗ずる時こそ妄念をひるがへして覺の心とはなれ、妄念のうちより申し出したる念仏は濁りにしまぬ蓮のごとくにて決定往生疑あるべからず。

（浄土真宗經典より）

（P.190）

妄念は凡夫の地体なり

第三段「また云く、妄念はもとより凡夫の地体なり...妄念のうちより申し出したる念仏は濁りにしまぬ蓮の如くにて決定往生疑いあるべからず」

日本人は、これを読めば分かります。信じる信じないは別ですが、日本人であれば分かる。これは日本人の特権です。これは源信の日本人への贈物です。七十年の勉強によって源信は日本民族にこれを遺した。私も恵心僧都の真似をしてみたい。私も日本民族に対して遺したい。この世だけで消えてしまうものでないものを遺したい。歎異抄を読みますと、「よろこぶべき心を抑へてよろこばせざるは煩惱の所為なり」と書いてあります。我々は人間に生まれたことを喜べ、福音に遇うことを喜べと言われても、すなわち、喜ぶべき道理はあるけれども、喜べない。五十年、六十年、キリスト教を学び、福音を学びました。喜ぶべきでありますのに、喜べない。それは、「煩惱の所為」だからです。これを罪人と言う。「信仰によって義とされるという」キリスト教の教義は、我々がこの世において義となるのではない。デイカイウーメノイ（義とせられつつ）、これは現在分詞であって、義とせられたのではない。我々は死ぬまで、義とせられつつ行くのです。本体は罪人、我々は死ぬまで罪人です。だから喜べない。煩惱、すなわち、妄念の所為で。煩惱とは妄念と同じことです。結局、源信の最後の段の教えは、「妄念のままで称名せよ」、「無信心のままで救い主の名を称えよ」ということです。

(P.192)

信仰の門題を解決する鍵は、行いにある

これを要するに、行いの問題は信仰によって解決する。信仰で救われて解決する。そして、信仰というものは、いつも妄念によって汚されているのだから、信仰の問題を解決する鍵は、神から来る行いにある。この神から来た行いとは「救い主の名を称えること」、ロマ書 10 章 13 節に「主の御名を呼び求める者は、すべて救われる」とある、その主の名を呼び求めるという行いです。「主イエスよ」でも、「主よ、憐れめ」でも、どちらでも宜しい。これが神が我々に下さった行いです。「我が主イエスよ」と唱えて、自分の信仰なきこと、罪の大きいことを知り、イエスの贖罪の力の無限なるを知り、結局、信仰を確立することができる。すなわち、これは神から来た不思議な妙なる行です。この妙行を、日本において、初めて最も明瞭に説明したのは源信です。我々は、源信に学んで、ロマ書 10 章 13 節を注意深く読む時に、キリスト教においても、神が「主の名を呼ぶ」という妙行を、ここに用意されていることに気付きます。この真理が、キリスト教の歴史においてまだ明らかにされておられません。残念です。

(祈り)

御在天の父様、今日は恵心僧都からいろいろと学ぶところがありました。我等も、天来の啓示された行い、主の名を呼び求めるという妙行が、イエスの無限の贖罪力が我々に届いた現れであるという深い意義を解する日が早く来ますよう、主よ、我々を憐れみたまえ。主の御名によって願い奉ります。

(P.193)

